論文の内容の要旨

氏名： 町田 百合絵
専攻分野： 博士（芸術学）
論文題目： F.リストのピアノ作品における標題と音楽の関連性
—《巡礼の年》をめぐって—

第１章　序

リスト（Franz Liszt 1811 - 86）のピアノ作品においては、技巧面に注目される傾向が強いといえる。リストはピアノという楽器の表現力の可能性を追求し、音響効果の極めて高い作品を数多く生み出した作曲家であると同時に、リサイタルを音楽史上初めて行い、アクロバティックな技巧で聴衆を驚嘆させた 19 世紀における最高のヴィルトゥオーゾピアニストでもあったため、彼の演奏活動において超絶技巧を駆使した華やかな作品は確かに必要であったが、それゆえに彼の作品は内面的に空虚であるといった誤解を招きやすい。リストの作品には、非常に緻密な構造を持ち、深い精神性や宗教心を表現したものも数多く存在するのであり、それらは特に文学作品や美術作品に関連する主題を用いた「標題音楽」というジャンルの作品に色濃く表れているのではないかと考えた。

本論文は標題音楽を切り口とし、リストのピアノ作品における音楽と標題のもつ詩的理念との関わりを考察することによって、リストの音楽の価値を再評価することを目的としたものである。実際には、リストのピアノ作品の中で標題音楽としての性格を最もよく表しているといえる《巡礼の年》を主題変容の観点から楽曲分析し、標題と音楽との結び付きから生まれる作品の精神性の高さを明らかにするとともに、標題の存在により詩的理念を内包した音楽の受容の可能性、またその内面性の表現における重要性を改めて考えるものとする。

第２章　絶対音楽と標題音楽

リストの標題音楽を考察するにあたり、標題音楽とそれに相対するものとして位置付けられる絶対音楽について比較考察を行った。標題音楽とは、絵画的・文学的・概念的な内容との関連で聴かれる器楽曲のことである。この用語自体は 1855 年にリストが『音楽新報』において連載していた「ベルリオーズと彼のハロルド交響曲」という論文で初めて用いた語と言われており、そこでリストは標題について「標題とは、器楽作品に分かりやすい言葉で付け加えられる序であり、それによって作曲者が、誤った詩的解釈されるのを防ぎ、作品全体の詩的理念、または作品の特定の部分に注目させようとするものである」と述べている。またリストは、音楽の展開や論理は描写しようとする主題に沿っていなければならないとし、聴き手の意識を作曲家の意図した方向へ導くための標題と内容に沿った主題、さらに彼が得意とした主題変容の手法を用いて、音楽と詩的な内容とを結び付けたのだと考えられる。

標題音楽的作品の創作はルネサンス期やバロック期には既に始まっていた。ここでは物語を描写した劇付随音楽や、聴覚的あるいは視覚的現象を模倣した作品にとどまっているが、古典派になると標題交響曲と呼ぶことのできる作品が見られるようになる。そしてロマン派において、感情の表出を可能にし、詩的な意味を伝えることのできる標題音楽は様々な作曲家によって数多く生み出された。しかし 19 世紀後期、旋律や和声、形式が多種多様になり始めると、叙述的な標題音楽は下火になる。20 世紀に 12 音技法や無調音楽が生まれると、純粋な音の構成のみによる作品に重きが置かれるようになり、リストが試みた音楽の内容と結び付き、詩的観念を表すという標題は意味をなさなくなっていったのである。

第３章　主題および主題変容の概念と実際

リストの標題音楽には音楽の構造上、主題と主題変容の手法が大きく関わっている。そこで、楽想の中心となる主題や動機の楽曲における扱われ方、および主題変容の具体的な方法について例を挙げ

ながら確認した。リストの主題変容においては、描写的・物語的な要素は薄く、ある性格や印象を伴った主題や動機が音楽を構築するための素材として展開されるという、比較的客観性を持った変容であるといえる。聴き手の意識をある方向へ向けさせるためには、主題に描写性や物語性を持たせることがより簡単な方法であるように思われるが、リストはそれよりも楽曲の形に断固としてこだわりを持ち続けた。

第４章　リストの標題音楽に対する見解

音楽は具体像を持たない聴覚芸術である。そこでリストは、形のある文学作品や美術作品を標題として用い、それらの作品が持つ観念的なものを明示することで、音楽の持つ意味を正しく伝えようと試みた。また楽曲においては、標題の性格を明確に表した主題を与えること、また明快な形式によって音楽そのものを分かり易くすることが必要であると考えた。主題や動機が明確に設定、配置されることによって聴き手は形式を理解することができるのであり、主題と形式という二つは音楽を構築していくうえで決して切り離せない関係にある。

第５章　リストのピアノ作品

リストの残した独奏用ピアノ作品の中で、特定の目的を持たない純粋なピアノ作品と思われる 54 曲について、標題音楽と呼ぶことのできる作品を確認した。これらの作品のなかには交響詩よりも早い時期に作曲された作品もあり、標題音楽の構想が明確化する前に試みて作曲されたものとも考えられる。

第６章　《巡礼の年》創作期

第 7 章における《巡礼の年》の楽曲分析に先立ち、創作契機となったスイス、イタリアへの旅行について、リストの日記や書簡などをもとに詳細な足取りを追った。それを地図に記すと、非常に精力的に各地へ足を運び、驚くほどの長距離を移動していたことが見て取れる。訪問した土地、またその際にインスピレーションを得た芸術作品や伝統芸術などを調べていくと、結実した《巡礼の年》の各作品との関連がより明白になった。

第７章　《巡礼の年》の概要および楽曲分析

リストのピアノ作品のなかで標題音楽としての性格を最もよく表しているといえる《巡礼の年》の全 26 曲を、主題と主題変容の手法に着目して分析した。結果は、標題の有無、主題の用い方、形式の明快さ、音楽の持つ性格などに諸々の差が認められたが、各楽曲の主題や動機は標題の持つ性格や雰囲気を明瞭に表したものであり、リズムや和声、調性などを変化させることで移り変わる曲想に主題の印象を合致させ、全体を通して標題に沿った音楽を展開させていた。また第 1 年、第 2 年および第 2 年補遺各曲の形式や構成は比較的掴み易いものとなっていたが、第 3 年に関していえば、その前衛的な作風はもはや標題音楽というジャンルに当てはめられるものではなかった。そもそもこれらの作曲時期には 40 年ほどの隔たりがあるため、作曲における方法や目的が変化したことは十分に考えられ、常に前衛的な創作に挑んでいたリストにおいては何の不思議もないことなのである。

リストの作品においては、主題変容の手法により明快な構造を伴ったものも多いが、さらに標題の存在が加わることによって音楽の象徴的意味を捉え、リストの意図した音楽の内容を真に理解することができるのだと考える。

第８章　結論

音楽について考える際、何よりも重要となるものが楽譜である。私たちは楽譜から全てを読み取り、理解しなければならない。この唯一の手掛かりとなる楽譜に、リストは言葉による標題を添付し、音楽を理解するためのヒントを与えたのである。標題音楽は、そもそも音楽という芸術が形の無い抽象的なものであるために生まれたジャンルであった。リストは音楽を、感情の本質の表現に最も適した芸術形態と考えたが、間違った解釈によっては音楽の価値が下げられてしまうと案じ、他の芸術と音楽とを結び付けた。しかしあくまでリストは、標題と音楽を融合ではなく結合と考え、標題の多用、

濫用を戒める一方、主題・動機の変容や発展、明快な形式という作曲理論にも徹底的にこだわった。重要なことは、標題音楽とは標題を単に音で描写したものではなく、自立した楽曲そのものに作曲者の精神が詩的理念となって反映された音楽であるという点である。

また音楽は演奏芸術としての性格を強く持つものである。そこで標題は聴衆に対してのみならず、作曲者と演奏者という存在が別々になった現在、楽譜だけを手掛かりに音楽を再創造しなければならない演奏家にとっても、作品の理想的な理解と、より良い演奏の可能性を探るための大きな助けとなることは間違いない。